

静岡県焼津市方言の過去表現

中 田 敏 夫

はじめに

静岡県焼津市方言(注1)では過去表現に関して次のような形式を有する。

1) ʃacu'wa kiNnoE sigotoni kita'jo/kike'jo あいつは昨日仕事に来たよ。

2) haruga kitanaE/*キケナー 春が来たなあ。

1) では kita (以下, -ta (-da) で表わされるものを「タ形」と呼ぶ), kike (以下, -ke (-ge) で表わされるものを「ケ形」と呼ぶ) のどちらも使いうるが, 2) では kike は使えない。1), 2) とともに共通語では「来た」とだけ表わされる場所である。

既に静岡県方言の過去表現に関しては山口氏('68)の優れた御論考がある。広範な調査地域と綿密な調査方法により, 県下に広く分布するケ形を「過去」, タ形を「完了」として分析記述されたものである。静岡県方言のケ形については新村氏('01), 東条氏('31)等により断片的に報告がなされてきたが(注2), 山口氏('68)は初めてケ形とタ形の関係を総合的に扱えたものと言える。

小稿は, 山口氏('68)に異論をはさむものではなく, 焼津市方言におけるケ形とタ形の網羅的な把握により, 上記のような使い分けの原理, 及び各々の意味用法を明らかにすることを目的とする。また, 老年層と青年層の用法の比較により, 過去表現に関する通時の変化の側面にも触れたい。

なお, 分析の手順上, 述語詞を以下のように分類しておく。

動詞的述語……………動詞及び動詞型助動詞

形容詞的述語……………形容詞及び形容詞型助動詞

名詞的述語……………名詞+ダ, 形容動詞及び形動型助動詞

1. 焼津市方言老年層(注3)

1.1. 動詞的述語に下接する場合

1.1.1. ケ形の用法(ただしタ形によっても表わされる)

(i) 動作・状態が現在の時点と隔絶した過去の特定の時間に起きた, あるいはある期間継続したことを表わす

3) ʃacu'wa kiNnoE sigotoE ʃaQke'jo あいつは昨

日仕事をやったよ。

4) ʃucinoʃacu'wa ʃuNbe'wa haʃaku nekezo 内のやつは昨晩は早く寝たぞ。

上記の例は動作の主体が三人称の場合であるが, 二人称, 自然現象, 物とかの場合も使われる。

5) ʃanta kesa'wa ʃakeni haʃaku ʃokikeneE あんた, 今朝はやけに早く起きたねえ)

6) kiNnoE'wa hisasiburini ʃameN huQke 昨日は久しぶりに雨が降った。

7) kesano deNsja mata ʃokureke'jo 今朝の電車, また遅れたよ。

ところが, 自己の動作になるとケ形は使わない。

8) ʃore'wa ʃuNbe'wa sakjoE noNda'jo/*ノンゲヨ 俺は昨晩は酒を飲んだよ。

9) ʃore'wa kiNnoE'wa haʃaku neta/*ネケ 俺は昨日は早く寝た。

この人称による区別の理由はむずかしいが, 後に簡単に触れることにする。以下挙げるケ形の用法では自己の動作であっても構わない。

(ii) 過去において習慣的にくり返された動作・状態, あるいは一定の条件のもとで実現した動作・状態を表わす

10) mukasjaE sizoEkanimo cukini ʃicidaE ʃiQkega 昔は静岡にも月に1度は行ったが。

11) sigotoE namakeruto ʃʃazini sugu ʃokorareke'jo 仕事を怠けると親父にすぐ怒られたよ。

(iii) 過去における動作・状態を回想的に表わす

12) ciEsæEkorae kokoni ʃoku kike'jo 小さい頃はここによく来たよ。

13) ʃwakæEkoronjaE ʃacumo ʃeEkaN sakjoE noNge 若い頃にはあいつもかなり酒を飲んだ。

単なる過去の動作の, いわば記録的報告的な表現とは異なり, 感慨をもって回想する気分がある。

(iv) ある動作・状態が実現したことに対して詠嘆的に表わす

共通語において, 今までやり方がわからずにいた事が何らかの方法でできた時に, 次のように表現する場面がある。

14) なんだ, こうすれば私にもできた(んだ)。

実現した事柄に対して, 一呼吸おいて, 感心とか驚

きの感慨をもって詠嘆的に表現しているのである。このような表現にもケ形が使われる。

- 15) naNda koEsurjaE 'orenimo dekike'jo
何だ、こうすれば俺にもできたよ。
16) konokusurjoE nuQtade kizuN ha'jaku na'oQke
danaE この薬を塗ったから傷が早く直ったんだなあ。

17) 'oreni i'waretade suna'oni musukomo i'Qkeda
naE 俺に言われたから、素直に息子も行ったんだなあ。

(v) ある存在・状態に対して、今気付いたことを表わす
18) o'i kokoni 'aQkezo おい、ここにあったぞ。

19) naNda koNna tokoni i'ke 何だ、こんな所にいた。

これは「アル、イル」とも言いうところだが、ケ形を使うことによって、過去から現在にわたって継続している状態を、今発見した、というニュアンスが表わされている。

(vi) 過去において既に確定している未来の事柄への気付き・確認を表わす

20) 'aQ 'asita'wa sigotoN 'aQke あっ、明日は仕事があった！

21) 'anohitoQci'wa 'akini keQkoNsurukotoni
naQteike あの人達は秋に結婚することになっていた！

上記2例は未来の事柄を言っているものであり、「アル、ナツテイル」とも表現しうところだが、ケ形を使うことによって忘れていた事を思い出した、気付いたというニュアンスを伴うことになる。これが他者に向って使われた場合、確認の表現となる。

22) 'asita'wa sigotoN 'aQkenaE 明日は仕事があったなあ。(相手に確認する)

(vii) 過去から現在にわたる存在や習慣などへの気付き・確認を表わす

23) 'omæE 'ohukuroga i'kenaE お前、お袋がいたなあ。

24) 'aNta tasika tabakoE suQkenaE あんた、確か煙草を吸ったなあ。

25) 'jæEzumaruri'wa zjuE'joQkani hazimaQkenaE
焼津祭は14日に始まるんだなあ。

これらの例は過去から現在にわたる存在(23)), 習慣(24)), 行事(25)) に対しての表現であり、「イル、スウ、ハジマル」と言いうところである。相手に確認する場合に使われるのが主だが、独自の使うことも可能である。

26) 'aNteE'wa tasika sakjoE noNgeñaE あいつは確か酒を飲んだなあ。(酒飲みのこと)

(viii) ある決まりきった動作・状態への気付き・確認を表わす

27) cuki'wa higasikara dekenaE 月は東から出たなあ。

28) koEkoEno'u'enjaE dæEgakuga 'aQkenaE 高校の上には大学があったなあ。

これは(vii)の用法に通じるものである。

(ix) ある動作・状態が実際には実現しなかったが、実現したものとして仮想して表わす

29) 'anohitoni tanomarerjaE 'oremo i'Qke'jo あの人の頼まれれば俺も行った(はずだ)よ。

30) kæErunoN 'osokaQtara 'ameni hurareke'jaE 帰るのが遅かったら、雨に降られた(はずだ)なあ。

31) moEcjoQtode kurumani bucukaQke もうちょっとで車にぶつかった(〜ところだった)。

32) moEcjoQtode keEsaN macigaQke もうちょっとで計算を間違った(〜ところだった)。

上記の例は、仮定条件が示された後に、話し手の推量判断が下されたもの(29), 30)), 及び「もう少しで」などという句に助けられ、事態が実現しなかった、実現するところであったという事柄を述べているもの(31), 32)) だが、いずれも実際には動作・状態が実現していない事柄に対しての表現であり、「仮想」ということばでまとめられよう。

1.1.2. タ形の用法(ケ形では表わされない)

(i) 過去に実現した動作・作用の状態が現在まで継続していることを表わす

33) mata tokeEN tomaQta また時計が止まった。

34) tabako'wa moE 'jameta 煙草はもう止めた。

(ii) 現時点において動作が完了したことを表わす

35) moE hirumesjoE kuQtaka もう昼飯を食ったか。

36) kodomaE moE sikudæE 'jaQta'jo 子供はもう宿題をやったよ。

(iii) 単純な「過去」の時点における自己の動作を表わす(ケ形(i)参照)

37) 'ore'wa 'juNbe'wa ha'jaku neta'jo 俺は昨晚は早く寝たよ。

(iv) 実際にはまだ実現していない動作・作用を確実に実現するものとみなして表わす

38) korede hjakuteN moraQta これで百点を貰った(貰えるはずだ)。

39) 'josi korede kaQta よしこれで勝った(勝つはずだ)。

「貰う、勝つ」コトは未だ実現していないのだが、夕形を使うことによって確実に実現するものとして表現した用法である。

(v) 自己の身体的精神的な状態を表わす

40) kjoE'wa huNtoni cukareta 今日には本当に疲れた。

41) 'aE biQkurisita ああ、びっくりした。

なお、共通語には粗野な命令を表わす「た」の用法

42) どいた！ どいた！ (どけ、どけ)

があるが、方言本来の用法では「ドケ」と表わされ、夕形もしくはケ形は使われない。

1.2. 形容詞的述語に下接する場合

形容詞的述語に接続する場合には方言形としては夕形は使われない。夕形は文章語的・共通語的意識が働いた際にもみ使われる。従ってここではケ形の用法のみを取り扱うことになる。

(i) 性質・状態あるいは感覚・感情などが「過去」時におけるものであることを示す

43) kjoEno sakana'wa bakani takæEQke 今日の魚はばかに高かった。

44) hisasiburini miNnato 'aQte 'uresiEQke 久しぶりに皆と会って嬉しかった。

(ii) 過去における習慣的な性質・状態などを表わす

45) konoko'wa ciEsæEkoro karadoN 'jo'wæEQke この子は小さい頃体が弱かった。

(iii) 過去における性質・状態などを回想的に表わす

46) 'jæEzumo mukasjaE 'iEQke'jo 焼津も昔はよかったよ。

(iv) ある状態に、今気付いたことを表わす

47) 'aQ kore'wa 'oreNnoziaE næEQke あっ、これは俺のじゃあなかった。

(v) 過去から現在にわたる性質・状態を確認することを表わす

48) 'omæEN hoEN 'o'jazisaN'jorika seEN takæEQke お前の方が親父さんより背が高かった？

(vi) ある決まりきった性質・状態を確認することを表わす

49) cikjuE'wa mariEQke naE 地救は丸かったなあ。

(vii) 実際には実現していない性質・状態などを仮想して表わす

50) 'aQcinomisede ka'jaE 'jasu'Qke あっちの店で買えば安かった (はずだ)。

1.3. 名詞的述語に下接する場合

これも形容詞的述語と同様、方言形としてはケ形のみで、夕形は共通語形として認識されている。

(i) ある事柄が「過去」時におけるものであることを示す

51) kiNnoE'wa 'jacu geNkidaQke'jo 昨日はあいつ、元気だったよ。

(ii) 過去における習慣的な事柄を表わす

52) ciEsæEkoraE hæEtetano'wa zoEridaQke'jo 小さい頃ははいていたのは草履だったよ。

(iii) 過去における事柄を回想的に表わす

53) rjoEni hazimete detanaE zjuEgoNtokidaQke'jo 漁に初めて出たのは15の時だったよ。

(iv) ある事柄に、今気付いたことを表わす

54) 'aQcinomiciN sizoEkadaQke (車の運転をしていて) あっちの道が静岡だった。

(v) 過去において既に確定していた事柄への気付きを表わす

55) koNdononici'joE'wa sigotodaQke 今度の日曜は仕事だった。

(vi) 過去から現在にわたる事柄を確認することを表わす

56) 'omæENci'wa sizoEkasiNbuNdaQkena お前の家は静岡新聞だったな。

(vii) ある決まりきった事実の確認を表わす

57) ni tasu saN'wa godaQkena 2たす3は5だったな。

(viii) 実際には実現していないが、実現した事柄として仮想して表わす

58) keEkaNni micukaQterjaE meNkjotori'ageda-Qke 警官に見つかってれば免許取りあげだった。

2. 夕形・ケ形の意味

2.1. 夕形・ケ形の本来の意味

接続上の特徴をまとめると、夕形は動詞的述語のみ見られ、形容詞的・名詞的述語の場合にはケ形のみが使われる。従って夕形とケ形の対立は動詞的述語に限ってみられることになる。そこで、動詞的述語におけるそれぞれの用法をふり返ってみる。ただし、ケ形の(ii)以下、夕形の(iii)以下は話し手の何らかの心的態度を反映した用法と考えられ、ここでは、テンス・アスペクト性に関わったところの、ケ形(i)と夕形(i)、(ii)の用法を対照させて考えることにする。

ケ形(i)と夕形(i)の差は次のような文に明確に現われている。

1) 'jacu'wa kiNnoE sigotoni kike'jo

2) haruga kitanaE

59) kiNnoE'wa sakana taNto toQke'jo 昨日は魚を

沢山取ったよ。

60) 'aNtamo tosjøE toQtane あんたも年を取ったね。

「来る、取る」という動作・作用が実現したことはケ形、タ形のどちらも共通している。問題は現在の時点(発話時)と関わり合いがあるかどうかという点である。内容的に、2), 60)は「春が来ている、年を取っている」という現在の状態が、動作・作用が実現したことと同時に問題にされている。それに対して、1), 60)は現在の状態は何ら問題にしていない。また、それぞれに否定形式を対応させてみると、次のようになる(注4)。

1)' ヤツハキンノーシゴトニコナカッタ

2)' ハルガ(マダ) コナイ/キテイナイ

59)' キンノーハサカナヲタントラナカッタヨ

60)' アンタモトシヲトラナイネ/トッテイナイネ

ケ形には両文とも過去形が対応するのに対し、タ形には現在形が対応している。

これらのことより、ケ形は現在の状態は不問に付し、動作・作用が特定の過去の時点において行なわれたという点だけを問題にした表現であり、タ形は現在の状態をも含みこみ、むしろ動作・作用の結果が現在の時点まで継続していることを問題にした表現であると言える。

次に、ケ形(i)とタ形(ii)の差は次のような文に現われている。

3) 'jacu'wa kiNnoE sigotoE 'jaQke'jo

36) kodomaE moE sikudæE 'jaQta'jo

61) kiNnoE'wa cjaNto mesjøE kuQkezo 昨日はちゃんと飯を食ったぞ。

62) moE mesjøE kuQtaka もう飯を食ったか。

先の例と同様、これも「やる、食う」という動作が実現したことはケ形、タ形とも共通しており、やはり現在の時点との関わり合いが問題となる。36), 62)は2), 60)のように動作・作用の結果が状態として現在の時点まで続いているとは言えない。しかし、現時点において「やる、食う」という動作が終わったか否かという点が問題にされており、やはり現在の時点に関わり合いがあることは確かである。このことは否定形式を対応させてみれば確認される。

3)' ヤツハキンノーハシゴトヲヤラナカッタ

36)' コドモハ(マダ) シクダイヲヤラナイ/ヤッテイナイ

61)' キンノーハメシラクワナカッタ

62)' (マダ)メシラクワナイノカ/クッテイナイノカ
ケ形が現在の時点に何ら関わり合いがないのに対し

て、タ形は現在の時点(発話時)において動作・作用が終わったことを問題にした表現であると言える。

以上のことより、ケ形は単純な意味での「過去」を、タ形は現在の時点(発話時)との関わりという点で「完了」を、それぞれ表わすと捉えられうる。「完了」というアスペクトの範疇が考えられない形容詞・名詞的述語にはケ形だけが使われるという事実も、ケ形が「過去」を示すとするを裏付けていよう。

2.2. タ形・ケ形の派生的な意味

ケ形(ii)以下の用法からみていくことにする。

(ii), (iii)は「過去」時における内容について思い出して回想・回顧するという、話し手の心理的・主観的な面の現われた表現であった。客観的なコトの有様について記録的・報告的に表わしたものは話し手の態度が色濃く出ている点で大きく異なる。(iv)は「詠嘆」としたが「回想」に含められよう。「回想」というのは結局は客観的な現在の時点からの時間的な距離に関わるものではなく、話し手の認識・判断の仕方により、たとえすぐ前の事柄であっても回想として反映されるものである。あくまでも心理的な時間においてである。(iv)の説明で「一呼吸おいて」としたが、これが即ち「回想」につなげる心理的時間なのである。(v)は「気づき」という、話し手の心理的・主観的な要素がこめられた表現であった。(vi)は(v)に通じるもので、共通語の「た」の同様の用法において三上氏('53)が「心理的完了」と名付けたことばにあるように、話し手の心的状態の反映として捉えることができよう。(vii), (viii)も(v)そして(vi)に通じる表現であった。(ix)は過去の事柄を仮想して推量判断をする、話し手の主観的な態度が最もよく現われた表現であった。

以上、ケ形の派生的な用法をながめてきたが、いずれにも認められるのは単純な意味での「過去」というテンス性を離れた、話し手の心理的・主観的な認識・判断を反映したムード性である。金田一氏('53)が共通語の「た」のうち、終止形だけに用いられる「主観的表現」としたものが当方言では広くケ形によって表わされるわけである。また金田一氏('53)はそれらを「感動助詞」と同ヒレヴェルで考えようとしたが、ケ形の派生的な用法はその意味での「感動助詞」に相当する位置にあることになろう。

次にタ形の用法(iii)以下をみる。

(iii)は自己の動作の場合、単純な「過去」を表わす用法であってもタ形のみが使われるというものであった。既にみた通り、ケ形は話し手の何らかの心的態度に関したものであれば他人の動作・自己の動作に関わらず

使われた。このことは逆に言えば、ケ形は話し手の心的態度を反映しない、物理的・客観的な表現には使われないということになる。単純な「過去」を表わす用法は「完了」と同様に客観的な事実を述べたものであるには違いない。しかし他者の動作・作用に対して認識・判断するのは当然ながら話し手そのものである。「Aが昨日仕事に行った」コトは確かに客観的な事柄・事実とみられようが、それはあくまでも松下氏（'30）の「我」の判断による。行ったか、行かなかったか不明であっても、「行った」と確認するような場合に「我」の判断が顕現しよう。それに対して、自己の動作について、行ったか、行かなかったか不明であって「行った」と判断するような状況は、単純な「過去」の意味において考えられるだろうか（無論、「私ならば行った（はずだ）」という主張を表わすものなど、「過去」の用法から離れたものには考えうる）。従って、単純な意味での自己の動作は純粋に客観的な事実として叙述されるのではなからうか。判断性が低い、あるいは陳述性が低いと言ったらよからうか。この点で、「過去」における自己の動作の表現というのは動作・作用のより客観的な事実としての「完了」という面に通じてくるのである。

これらのことより、当方言において単純な「過去」における自己の動作にケ形が使われないというのは、ケ形の性格として話し手の心的態度が基本におかれていることによるものであり、単純な「過去」における自己の動作というものの持つ性格によるものであることが理解される。(iv)は動作・作用が「完了」したものと表現されているものであるためにケ形が使われないのであろう。また、(v)は自己の動作にはケ形が原則として使われないことに通じるものであろう。

2.3. 「タッケ」の形で現われるケ形の意味

共通語では、「たっけ」は動詞・形容詞・名詞的述語のいずれに接続した場合もみられるが（「行ったっけ、赤かったっけ、男だっけ」）、当方言では動詞的述語に接続した場合にのみみられる。これは当方言では「赤カッタ、男ダッタ」という、「形容詞・名詞的述語+タ」の形式自体が方言形としてはないためである。従って「タッケ」の形で問題になるのは「動詞的述語+タ+ケ」の場合である。

「タッケ」の具体的な用法は話し手の心的態度を反映したケ形の用法とかわるところがない。

62) mukasjaE sake'ō joku noNdaQke 昔は酒をよく飲んだっけ。

63) naNda koNnatokoni 'aQt aQke 何だ、こんな所

にあったっけ。

64) moEcojQtoode kurumani bucukaQtaQke もうちょっとで車にぶつかったっけ。

更に、単純な「過去」を表わしていると考えられる文脈においても使われる。

65) 'jacuga kitaQketokinjaE biQkurisita あいつが来た時にはびっくりした。

66) 'jacumo keQkjoku'wa noNdaQkezura 'jo あいづも結局は飲んだんだらう。

山口氏（'68）はこれらは「文法上『完了形の過去形』という体系上の位置に立っているのである」と説明し、「タッケ」を「過去完了法」として扱っている。しかし、63)の気付きの表現、64)の仮定の表現、65)のような単純な「過去」の表現は果たして「過去完了法」として説明しうるものであろうか。むしろ、山口氏（'68）が「注意深く観察すると、なかには癖として、自己の過去の動作はすべてこの形で用いる個人がある」ことの説明として「過去と完了の対立はありとはいえ、過去形が非常に衰微している今日、この『完了の過去形』がそれに代ってかなり幅をきかせていることも事実である」と述べていることに注目したい。実際の談話の場面では動詞的述語のケ形の使用は非常に衰えている（このことは後にみる青年層の状況を考え合わせれば首肯しよう）。それに取ってかわったかのように「癖として」「タッケ」の形が頻繁に使われているのである。結局これは、動詞的述語において「過去」を表わすケ形の消滅の補充形として、タ形プロパーではなく、「タッケ」も採用されたことを物語っているのであろう（注5）。従って「タッケ」に使われるケ形は、田中氏（'63）の「文末に余情をこめる文末助詞」として機能する共通語の「たっけ」の「け」とは性格が異なり、この形で「過去」というテンス性、更に「回想」などのムード性を担っているものと考えられる。

なお、極めて特徴的なケ形の形式が拾い出されているので報告しておく。それは、あいさつ語と言われているもののうち、感謝を表わす「ありがとう」、陳謝を表わす「ごめん、すいません」にケ形が接続した形式である。

67) konomæE'wa doEmo 'arigatoEQkene この前はどうもありがとうね。

68) kiNnoE'wa gomeNkena 昨日はごめんな。

69) doEmo kono 'æEda'wa 'iEmoNsu'imaseNkene どうもこの間はいい物をすいませんでしたね。

あいさつ語は表現者の相手に対する気持ち、主体的な働きかけを表わすものであり、この点で話し手の心

的狀態を反映する性格を持つケ形が結びつきえたのであろう。意味的には「アリガトー、ゴメン、スイマセン」と殆どかわるところがない。

以上、焼津市方言老年層のケ形の意味・用法をまとめると次のようになる。

1. 単純な意味での「過去」というテンス性を示す。
2. 話し手の心理的・主観的な認識・判断を反映したムード性を示す。
3. 「タッケ」の形で、テンス性・ムード性を示す。

3. 焼津市方言青年層(注6)

ここでは焼津市方言青年層におけるケ形の用法について簡単に触れ、当方言における過去表現の通時的な変化の側面を明らかにしたい。

青年層のケ形の用法の特徴をまとめると次のようになる。

- (1) 動詞的述語には単純な「過去」を表わす場合でも使われない。

70) kiNnoE aNteE'wa aSubini iQtazo / *イッケゾ
昨日あいつは遊びに行ったぞ。

- (2) 動詞的述語には話し手の心的態度を反映したいくつかの用法に限られ使われる。

- (i) ある動作・状態が実現したことに対して詠嘆的に表わす

71) konomicjoE kurjaE kokoni bucaruQkidana
この道を来ればここにぶつかったんだな。

- (ii) ある存在・状態に対して、今気付いたことを表わす

72) aQ ciga'uQki (数学の計算をしていて) あっ、
違った!

- (iii) 過去において既に確定していた未来の事柄に気付いたことを表わす

73) asita'wa miNnato sigotoga aruQki 明日は皆
と仕事があった。

74) soE'ijaE a'icumō iQsjoni ikuQki そう言えば
あいつも一緒に行くんだった(行く事になっていた)(注7)

- (iv) 過去から現在にわたる存在や習慣などを確認することを表わす

75) oma'e okaEsaNga iruQkinaE お前、お母さん
がいたなあ。

- (v) ある決まりきった動作・状態を確認することを表わす

76) cuki'wa higasikara deruQkinaE 月は東から出
たなあ。

- (vi) ある動作・状態が実際には実現しなかったが、実現したものとして仮想して表わす

77) moEejoQtode kurumani bucaruQki もうち
よつとで車にぶつかった(〜ところだった)。

- (3) 形容詞・名詞的述語には「過去」を表わす場合、話し手の心的態度を表わす場合のそれぞれに使われる。

78) juEbeno terebi'wa omosireEQki 昨晚のテレビはおもしろかった。

79) aNteEno hanasi'wa hoNtoEdaQki あいつの話は本当だった。

- (4) 「タッキ」の形で動詞的述語にのみ接続して、テンス性・ムード性を示す。また「ゴメンキ」などの特殊な用法にも用いられる。

80) a'icumō iQsjoni aSubiE iQtaQkisoEda'jo
あいつも一緒に遊びに行ったそうだよ。

81) konoma'e'wa gomeNkina この前はごめんな。

なお、青年層では取る形態が /ki/ であるが、これは、形容詞、例えば /uresi'i/ 「嬉しい」の末尾音 [i] に /ke/ の [e] が順行同化した結果生まれたものと考えられ、「もの」は、老年層と同じである。また、動詞的述語に接続する場合、終止形に促音の加わった形に接続している点も注意を要する。

さて、これら特徴を具体的に老年層と比較吟味していくことにする。

特徴(1)は老年層のケ形の持っていた「過去」を表わすという機能の喪失を示している。既述の通り、老年層においてもケ形とタ形は「過去」と「完了」の相補的な使用分担をしているのではなく、「過去」はタ形もしくは「タッケ」でも表わされえ、ケ形は非常な衰えをみせていた。それが青年層に至って、動詞的述語におけるケ形の「過去」を示す機能の完全な消滅がもたらされることになったのである。そしてそれを取ってかわったのが「完了」を担うタ形、もしくは特徴(4)の「タッケ」ということになるのであろう。この間の事情は、国語史上、「完了」の助動詞、「過去」の助動詞がそれぞれのカテゴリーを区分していたのが、「たり」から生まれた「た」によって一本化していったとされた事実(注8)と並行的に考えられよう。

次に、特徴(2)は若干用法に差異はみられるが、老年層のケ形の持つムード性をそのまま受け継いだものである。このことより、ケ形は「過去」というテンス性は喪失していったが、話し手の心的態度を反映したムード性は残存したという事実が明確になった。また、老年層の用法に比べ、明らかに「過去」の事柄である

という referent を持っている「回想」というムード的な表現には使われない点、形式上、連用形接続から終止形に促音の加わった形に接続が取ってかわっている点より、「過去」を表わすというテンス性の喪失とともに文末助詞化（感動助詞化）の傾向を示しているものと言える。形容詞の述語については老年層でも終止形に促音の加わった形への接続であった。しかしこれも古くは連用形接続であったと推定され(注9)、既に文末助詞化の傾向は老年層においても色濃くみられたとすることができる。

特徴(3)は老年層と全く同様の状況である。動詞の述語と平行的に考えれば、形容詞・名詞の述語についても話し手の心的態度に関わった表現だけに制限されていってもよいはずだが、依然としてすべての表現にケ形が生き生きと使われている。これは、これらの述語詞は動詞の述語に比べより話し手の心理的・主観的な判断性に富んだものであり、ムード的色彩の濃いケ形が結びつきやすいことによるものであると考えられる。

特徴(4)についても老年層と全く同様である。これも特徴(2)と同じく、ケ形を持っているムード性がそのまま引きつがれたものと考えられる。

4. 結び

小稿では、まず焼津市方言老年層のケ形とタ形の具体的な用法をながめ、ケ形を「過去」、タ形を「完了」として、それぞれの本来の意味を把握した。またケ形の派生的な用法を吟味し、話し手の心的態度を反映した側面—ムード性を明らかにした。

次に、青年層のケ形の状況をながめ、ケ形の通時的変化をみた。明らかになったのは、動詞の述語に関してケ形は「過去」を示すテンスの側面を喪失し、ムード的な側面にしばられていったことである(この際、形容詞・名詞の述語に起こらなかったのは、これらの述語詞の性格とケ形の性格によるものであった)。また、接続上の変化から、品詞論的に「助動詞」から「文末助詞(感動助詞)」へその位置を移行していったと把握した。

ところで、本土東部方言には広くケ形としたものが存する。例えば、山形県の「もう少して忘レッケー(忘れるところだったよ)」(注10)、茨城県の「ヨムゲ(『読む』の回想、中田注)」(注11)、伊豆利島の「ウシロエ ウシロエ 歩イテイッヶ(歩いて行った)」(注12)などである。本土東部方言の一画である東京語でも「ああ、そうだっけ」「行ったっけ」のような形では使われる。これらよりケ形が本土東部方言に広く分布

することは知られるが、各地の状況はそれぞれ異なっていよう。典型は焼津市方言老年層と東京語である。テンス的側面からムードの側面までを備えた焼津市方言老年層に対し、東京語ではごく限られた文末助詞の用法しか備えていない。しかし、東京語でも古くは次のような例がみられる(注13)。

あをかうせんの会をする比 わっちめらも以前
はちゃを青かうせんとゆつてたべけ

吉田のなにがしのいつけことく筆をひったくれ
はものかんなじる事を思ひ…

従って、現在のような限られた用法しか持たない東京語も古くは焼津市方言老年層のような状況にあったことを思わせる。それが、焼津市方言の老年層から青年層への変化にみられたように、テンス性の喪失を起し、ムード的側面に限られていった、更に、その中で用法の狭まりが起り、現在のような状況に至った、と推測させる。

本土東部方言においてみせているケ形の諸相は単純な「過去」を示すテンス性から話し手の心的態度を反映したムード性までの一本の軸の中で把握されよう(論及しないが、先に挙げた山形県以下の例もこの軸の中で押さえられると考える)。その変化の流れはテンス性からムード性への方向をとる、それとともに「助動詞」から「文末助詞(感動助詞)」の位置への品詞論的移行が引き起こされると考える。

今後、共時態における事実、国語史的事実をあわせて、ケ形即ち「け(り)」を総合的に問題にしていきたいと考えている。

山口 幸洋氏('68)「静岡県方言の過去表現について」(『国語学』75.)

新村 出氏('01)『語学涓滴』(これは中村通夫氏「東京語の性格」からの孫引である)

東条 操氏('31)「静岡県方言の重要性」(『土のいろ』8-5)

三上 章氏('53)『現代語法序説』

金田一春彦氏('53)「不変化助動詞の本質(下)」(『国語国文』22-3)

松下大三郎氏('30)『改撰標準日本文法』

田中 章夫氏('63)「終助詞と間投助詞」(『日本文法講座・助詞』)

注1 静岡市より西へ約10キロ。過去表現に関しては静岡県中部方言を代表する地点と考えてよ

かろう。

- 注2 この他、徳田政信氏「静岡県岳南語法一用言之部」(『方言』5-2, '35)、佐藤義人氏「駿河岡部の方言と風物」('67)、山口幸洋氏「水窪一語法にみる遠州山地方言のサンプル」(『国語学』34 ('58))などにみられる。
- 注3 土地生え抜きの男性一人(明38年生)、女性二人(明38年生、明40年生)の調査結果である。昭和50年から53年にかけて再三にわたり臨地調査を行なった。翻訳法が主だが、自然談話の資料もかなり得られた。
- 注4 否定形式を対応させて「過去」と「完了」の検証を行なう方法は寺村秀夫氏「'タ'の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的位置付け—」(『言語学と日本語問題』('71))によった。
- 注5 これは静岡大学中條修先生のご教授による。
- 注6 土地生え抜きの男性一人(昭28年生)の調査結果である。昭和50年に臨地調査を行なった。
- 注7 これは動作動詞に接続した例だが、老年層ではこの例はみられなかった。老年層では次のように「ダ」を介して表現される。
- 注8 飛田良文氏「完了の助動詞」(『品詞別日本文法講座・助動詞』('47))などにみられる。
- 注9 東条('31)に「伊豆・駿河では多く『おもしろかけ』といふやうに云ひ」とあり、また焼津市周辺の静岡市・藤枝市・島田市の山間部では連用形接続である(中田臨地調査による。未発表)ことにより、推定される。
- 注10 斎藤義七郎氏「宮城・山形」(『方言学講座東部方言』('61))による。
- 注11 宮島達夫氏「福島・茨城・栃木」(『方言学講座東部方言』('61))による。
- 注12 大島一郎氏「伊豆利島方言の語法(II)」(『国語学』49. ('62))による。
- 注13 「清十郎追善奴俳諧」(中村通夫氏「東京語の性格」からの孫引である)からの引用である。

〔付記〕

小稿は昭和53年2月25日都立大学方言学会、昭和53年11月18日静岡県方言の会での口頭発表をもとに書き改めたものである。当日の参会者の皆様には有益な意見を多く賜わった。記して感謝の意を表します。